

Title	書評：鈴木正崇著『日本の山の精神史：開山伝承と縁起の世界』青土社、2024年
Sub Title	
Author	東野, 隆弘(Tōno, Takahiro)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2025
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.30 (2025. 7) ,p.93- 95
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20250701-0093

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評：

鈴木正崇著『日本の山の精神史——開山伝承と縁起の世界』

青土社、2024年

東野 隆弘

本書は女人禁制や霊山の峯入り、修験の儀礼など複数の観点から山岳信仰の研究に取り組む著者によるものである。日本人の山岳信仰を山の精神史と捉え直し、開山者の伝承や縁起から読み解いていくことをこの書籍の主題としている。

本書の構成は以下の通りである。

- 第一章 山岳信仰と仏教—開山の思想を中心に
- 第二章 出羽三山の開山伝承—『羽黒山縁起』を中心として
- 第三章 鳥海山の信仰と修験—縁起・儀礼・芸能
- 第四章 早池峯山と『遠野物語』—史実と縁起のはざま
- 第五章 戸隠の縁起を読み解く—『戸隠山顯光寺記』を中心に
- 第六章 開山伝承と現代—日光山の勝道をめぐって

第一章は開山伝承の説明から始まる。信仰対象の山には開山者の話が伝わり、名前と年号が明記され、起源や由来を語ることで過去と現在が繋がって山の聖性が正統性を獲得するとする。開山は禁断の不入の聖域に敢えて分け入り、山頂に至って神仏を拝み祀る実践であり、山の靈力を身体に付け、山の聖性を開示して新たな秩序を確立する特別な行為であると鈴木は説明する。役行者も「祖師」信仰の影響を受けて修験道の開祖に祀りあげられたと推定され、山岳信仰の「正統実践」(orthopraxy)を主張する言説として、開山伝承から開山縁起へと展開し、言説の多くが役行者に収斂したとする。開山伝承を「偽史」(fake history)ではなく「擬史」(pseudo history)と名づけ、その多くが平城京遷都から平安京遷都の間に多いことに鈴木は注目し、国家の転換期に合わせた意図的な「遡及史観」(retrospective history)であり、仏教の影響を受けた山岳登拝の正当性 (legitimacy) や正統性 (orthodoxy) を語る言説とする。同時に地元の人々にとっては歴史書と異なる「もう一つの歴史」(another history) の地域ごとの創造とする。開山伝承からは日本史の新たな時代区分が可能になる可能性もあるとし、① 仏教公伝から開山伝承までの百五十年間、② 奈良時代から神仏混淆が広く展開し深化を遂げた江戸時代までの千百五十年間、③ 明治元年の神仏分離以降の百五十年間、に分ける。開山伝承は山岳信仰と仏教の融合を伝え、日本の歴史を巨視的に読み解く基軸となり、近代の百五十年を見直すことに繋がると鈴木は考える。

第二章は東北地方の出羽三山について『羽黒山縁起』を中心として開山縁起を読んでいく。縁起の神仏混淆の想像力を復権させて出羽三山の独自性を問い直し山岳信仰や修験道の理解を深化させるのを目標とする。前近代から近代にかけての神仏分離に関わる信仰の変貌から始まり、次に三山の構成の変遷についてそれらの構成が景観に関わることに着目する。中世の縁起に触れた後、『羽黒山縁起』を開山伝承、能除太子、堂舎の建立、修行、湯殿山の秘儀、開山伝承の歴史化、行基と空海との関係、羽黒山の天台化などに着目して解説し、羽黒山を巡る聖地の展開に伝承が展開することを指摘する。その大きな流れは仏教化であり、一方で根底にある山、水、森、岩などの民間信仰は直接的には現れないとする。最後に開山者の名称の変遷について触れ、明治期に暴力的に神仏が分離されたことを指摘する。

第三章は山形県と秋田県の県境の鳥海山についてであり、三部から構成される。一部では鳥海山の概況から始まり、噴火を繰り返し、大物忌神が鎮座する山として畏れ祀られてきたことが解説され、一方で水源（水分）の山であり、豊作を齎す山であると指摘される。二部は鳥海修験の特に蔵岡を中心に展開する。『出羽國大泉庄三権現縁起』や『鳥海山記并序』に触れ、支配権の争いなど縁起生成の背景に時代の動きを見る。鳥海修験の特色に峯入りの「出峯」に際して山麓の寺社や集落で舞楽・田楽・神楽など中央から伝来した芸能を修験道の儀礼に取り込み多彩な展開を見せたことを挙げ、芸の習得を通じて一人前の修験者になるとされる。三部は鳥海山麓の伝承であり、蔵岡以外の各地の伝承・儀礼・芸能の考察になる。吹浦から始まり、『大物忌小物忌縁起』などを取り上げ、吹浦の縁起の特徴を慈覚大師円仁の開基を伝えることとする。さらに吹浦の伝承として日本では稀な「卵生神話」を『大日本国大物忌大明神縁起』からとりあげ、トーテミズム（totemism）の起源神話で円仁の開創を語って神話と歴史を結合させたとする。矢嶋や瀧澤などの修験にも触れる。この章の最後では鳥海山とその集落の形成と対立を見ながら、明治の神仏分離が各修験に大きな打撃を与え、さらに道路の開通により「観光の山」に変わっていくことに力点が置かれる。一方で文化財としての評価や地元の民俗が山岳信仰を支えてきたことが挙げられている。

第四章では岩手県の早池峯山が主題である。『遠野物語』の記述から始まり、三女神の話を取り上げ、『遠野のくさぐさ』収録の記述や他の伝承と比較する。早池峯山の開山伝承は元禄十一年の『奥州南部早池峯山縁起』に記され、時代背景に西の登拝口の拠点（稗貫郡の嶽妙泉寺）と南の登拝口の拠点（遠野の大出の遠野妙泉寺）の争いがあるという。大出神楽は開山者の家とその縁者を担い手として伝えてきたが、開山伝承が神楽の継続の原点にあったとする。神楽は修験の唱導・教化活動を担い、民衆との接点であったが、『遠野物語』には組み込まれなかったと鈴木は指摘する。稗貫側には遠野とは異なる縁起、『早池峯山由来記』が伝わり、そこにも対立と縁起の関係を鈴木は見る。そして早池峯山に戻り、水神、狩猟の神、森神、作神、漁撈神など広い意味での山の神信仰があるとする。『遠野物語』の人々の暮らしへのまなざしの希薄さについて取り上げ、伝承の深層の追求によって『遠野物語』の世界を地元民の手に取り戻すことを課題として提示する。

第五章では長野県の戸隠山の縁起を読み解く。最初に戸隠の略史を述べた後、戸隠信仰の特徴として景観をあげ、飯縄山と戸隠山、黒姫山と荒倉山の方角の関係性や太陽の信仰と関連させる。また、水、池、岩、洞窟などにも着目する。最初に『阿婆縛抄』をとりあげ、中世の諸相を検討する。飯縄山から戸隠山、つまり「前山」から「奥山」という関係や次に開山者の「學問」（『阿婆縛抄』）での表

記)あるいは「學門」(以後の縁起に多く使われる表記)の位置付けを他の縁起も引きながら検討する。次に『戸隠山顯光寺流記』を取り上げる。これは在地の開山伝承を伝え、当時の堂社、祭神、本事物などを記すという。開山と狩猟民、またこれらの中世の祭神が江戸期には神道化すること、九頭龍の出現と戸隠の名称の由来、それ以降の様々な院の成立とその変容を取り上げる。さらに中世の祭神と『戸隠山昔事縁起』から見る近世の祭神の違い、中世と近世の年中行事の違い、平成以降の状況などを見て、さらに民間信仰の観点から考察を付加する。近世では乗因による戸隠修験の改革運動に注目して、戸隠山の再構築に触れていく。乗因の意図は戸隠の歴史や思想を「三国伝来」の枠組みの中で縁起を再構築することにあったとするが、皮肉にも現代の我々は逆に乗因の眼を通して中世を見ることになっていると鈴木は記す。

第六章は栃木県の日光山である。勝道を開山、開祖とする信仰が古代から現在まで続いて事実が重要であるとする。勝道の事績に関して『補陀落山建立修行日記』から説明し、またこの開山伝承は出家僧と優婆塞を兼ねた行者の理想像を描き出すとする。また仏教化された「星と水」の信仰があるとする。また、空海や円仁の伝承を取り上げる。加えてマタラ神の信仰に触れる。日光三所権現が確立した後、神々の由来を語る『日光山縁起』が作成され、日光権現を狩猟の神とする伝承が広まる。狩猟神の宇都宮大明神の神威を語り、貴族や特権階級によって支えられてきた日光山信仰を民衆の手に奪還する語りでもあると指摘する。続いて中世の日光修験の峯入や室町時代後期の没落に触れる。近世では東照社の造営が行われ、家康は「神」、家光は「仏」として祀られ、また門跡寺院となり政治性が卓越する霊地に転換する。さらに天海による勝道の墓所の移動に触れ、日光のコスモロジーの転換とする。近代以降は明治九年の復興以降、景勝地や世界遺産になったことに触れ、現代では峯入りは消滅したものの開山への思慕は四季の行事を通じて反復されているとする。

章の最後で全体がまとめられている。開山伝承や縁起は歴史の出来事に応じて変化し史実と伝承を超えた第三の言説空間を生み出したが、明治の神仏分離が神と仏の柔軟な関係を破壊して一元化し、過去との連続性を断ち切った。この書籍で行ったのは地域に根差して、当事者の声を掘り起こすことで普遍に至る道を模索する試みであり、日本の精神史の地下水脈を広く共有して、イメージと想像力を復権させ、日本文化の多元的理解に至る道が開ける可能性を指摘する。最後にあとがきでは精神史という用語を使った理由についての説明がなされる。

分量を減らして各章の紹介を行ったため、地域ごとのユニークな内容に触れられなかったが、東北から北関東、信州の霊山における開山伝承と縁起を見ることで、生き生きとした人々の山での実践の様子や様々な要因による実践の変化が分かる。それらの取り組みはどれも個性的であり、一つの山でも関わる人々や地域によって大きく関係性が異なり、それが縁起にも反映される。一方で明治時代の激動は中国の文化大革命のような広範囲にわたる大きな衝撃を思わせる。また本書で繰り返し出て来るのが景観や水や岩や洞窟などへの着目である。作者が自ら足を運び、麓や山の中から山を見た経験が伝承や縁起の読み解きや、縁起に出てこなかった民間信仰への指摘に活かされているのではないかなと思われる。今回取り上げられてない四国や中国、九州地方などについても同様の研究が進むと、鈴木という精神史の地下水脈がより豊かな姿と共に見えてくるのではないだろうか。

(とうの たかひろ 慶應義塾大学大学院社会学研究科後期博士課程)